

Title	世襲代議士と選挙区：広島県二区を中心として
Sub Title	Political families and their constituency : a case study of the Second District of Hiroshima Prefecture
Author	市川, 太一(Ichikawa, Taichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1988
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.61, No.12 (1988. 12) ,p.137- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	多田真鋤教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19881228-0137">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19881228-0137</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 世襲代議士と選挙区

——広島県二区を中心として——

市川 太一

- 一 はじめに
- 二 二区の特徴と代議士の得票構造
- 三 高得票の町と町議会議員
- 四 おわりに

### 一 はじめに

広島県二区は全国有数の「世襲」選挙区である。例えば、過去三回の衆議院総選挙の結果にみられるように、全国的にも第二ランクに位置している（第1—1表参照）。議席の世襲は最近顕著になった現象には違いないが、しかし「広島県の政治的家族」<sup>(1)</sup>においてすでに明らかにしたように、二区においては戦前、戦中、戦後を通じて、同じ一族から多くの政治家を輩出してきた。帝国議会開設以降、一〇〇年近くにわたって、このような現象が同一選挙区に観察で

第1-1表 日本の世襲選挙区

平均 占有率	選挙区	定数	議員名		
			第36回総選挙 1980/6	第37回総選挙 1983/12	第38回総選挙 1986/7
88.9%	青森2区	3	竹内黎一 田沢吉郎 木村守男(ク)	竹内黎一 田沢吉郎	竹内黎一 田沢吉郎 木村守男
	埼玉4区	3	野中英二 三ツ林弥太郎 青木正久	三ツ林弥太郎 青木正久	野中英二 三ツ林弥太郎 青木正久
	香川1区	3	木村武千代 藤本孝雄 前川 旦(社)	木村武千代 藤本孝雄 前川 旦(社)	木村義雄 藤本孝雄
75	岩手2区	4	志賀 節 小沢一郎 椎名素夫	志賀 節 小沢一郎 椎名素夫	志賀 節 小沢一郎 椎名素夫
	秋田2区	3	川俣健二郎 笹山登生	川俣健二郎 笹山登生	川俣健二郎 笹山登生
	広島2区	4	谷川和穂 池田行彦 中川秀直	谷川和穂 池田行彦 中川秀直	谷川和穂 池田行彦 中川秀直
	山口1区	4	林 義郎 安倍晋太郎 田中龍夫	林 義郎 安倍晋太郎 田中龍夫	林 義郎 安倍晋太郎 田中龍夫
66.7	埼玉2区	3	山口敏夫(ク) 小宮山重四郎	山口敏夫(ク) 小宮山重四郎	山口敏夫 小宮山重四郎
	長野2区	3	井出一太郎 羽田 孜	井出一太郎 羽田 孜	井出正一 羽田 孜
	岡山一区	5	大村譲治 逢沢英雄 平沼赳夫	大村譲治 逢沢英雄 平沼赳夫	大村譲治 逢沢英雄 平沼赳夫 江田五月(社民)

さるの、後継者を育成する家族の存在にとどまらずに、二区(2)のなかに政治家を次々と生みだしていく地域的要因があることを推測させる。

本稿は、現在の広島県二区に範囲を限定して、三人の衆議院議員、池田行彦、谷川和穂、中川秀直の世襲の実態と

- 1) 平均占有率は第36回から38回までの総選挙において、一つの選挙区の定数において父・義父などが衆議院議員であった者の平均である。
- 2) (ク)は新自由クラブを、(社)は社会党を、(社民)は社会民主連合を、そして印のない代議士は自由民主党を表す。
- 3) 山田太郎(岡山1区・公明党)のように、弟が参議院議員全国区の場合は除いた。

それを生みだし、維持している要因を、得票構造との関係において明らかにする。次に、各代議士のもっとも高い得票率をあげている豊浜町、福富町、豊栄町とその町議会議員に焦点をあて、世襲代議士に高得票を与えている地域特性を探る。町議会議員にも世襲は存在しているのだろうか。第三に、国会議員の世襲という問題を町議会議員と結びつけて考えてみる。集票の際に一定の役割を果たしていると思われる町議会議員と世襲代議士の支持関係は、どのようなものだろうか。そして最後に、代議士職が受け継がれるときの重要な要因、地盤の意義を再考してみたい。

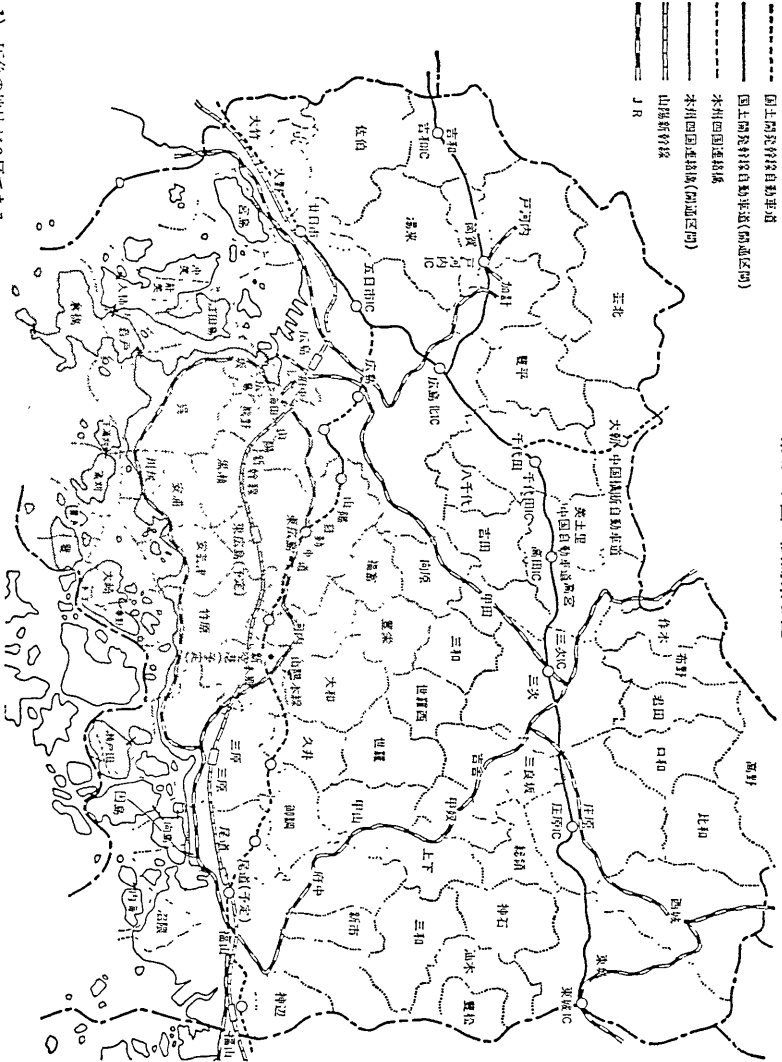
これらの課題を解決するために文献<sup>(3)</sup>以外に、町長や町政関係者、代議士秘書へのインタビュー、そして一九八八年七月から八月にかけて三町の町議会議員を対象にして、町議会議員の世襲と町議会議員の世襲代議士の支持に関するアンケート調査を行なった<sup>(4)</sup>。

## 二 二区の特徴と代議士の得票構造

二区には特徴のある都市が点在している。人口のもっとも多い呉は戦前は海軍の、戦後は造船の町として広く知られている。現在は造船不況の波を直接に受けている。東広島市には灘、伏見と並ぶ「酒都西条」がある。最近、広島中央テクノポリスの地域指定を受け、新幹線駅が開業した<sup>(5)</sup>。高速道路・山陽自動車道のインターチェンジの開通や近隣の町に新空港の開港が予定されており、広島市と福山市の中間に位置する第三の都市圏に発展しようとしている。竹原市はかつては塩田の町として栄え、賀茂郡は広島県の米どころである。

二区全体を見渡せば、二四の町のうち実に一町が島であり、五町は瀬戸内海に面している。造船不況、みかんの低迷、オレンジの自由化の脅威にさらされている島々は、瀬戸内海の自然環境を生かし、リゾート地への変身を計ろうとし、観光に期待をかけている<sup>(6)</sup>。

第2-1図 広島県2区



1) 灰色の地底が2区である。

第2-1表 2区の政党別立候補者・当選者数

選挙回(年月日)	自民党系		社会党系		共産党		民社党		公明党		新自ク		その他		総計
	立	当	立	当	立	当	立	当	立	当	立	当	立	当	
22回(1946. 4.10)		2		2											
23 (1947. 4.25)	7	3	1	1	1	0							2	0	11
24 (1949. 1.23)	5	3	1	1	1	0							2	0	9
25 (1952.10. 1)	7	3	1	1	1	0									9
26 (1953. 4.19)	4	3	2	1											7
27 (1955. 2.27)	5	3	2	1											7
28 (1958. 5.22)	5	4	2	0									1	1	6
29 (1960.11.20)	4	3	1	1	1	0	1	0					1	1	8
30 (1963.11.21)	4	3	1	1	1	0									6
31 (1967. 1.29)	4	3	1	1	1	0							1	0	7
32 (1969.12.27)	4	4	1	0	1	0			1	0					7
33 (1972.12.10)	4	3	1	1	1	0							2	0	8
34 (1976.12. 5)	4	2	1	1	1	0			1	0	1	1	1	1	8
35 (1979.10. 7)	3	3	1	1	1	0	1	0			1	0	1	1	7
36 (1980. 6.22)	3	3	1	1	1	0							1	1	6
37 (1983.12.18)	4	3	1	1	1	0									6
38 (1986. 7. 6)	4	4	1	0	1	0									6

- 1) 立は立候補者を、当は当選者を表す。
- 2) 自民党系には協同党、国民協同党、進歩党、民主自由党、民主党を、社会党系には分裂していた当時の右派、左派社会党を含む。
- 3) その他には諸派、無所属を入れた。
- 4) 当選時の無所属は当選後に所属した政党に算入した。

選挙の面からみれば、戦後の二区は激戦区である。中選挙区に戻った二三回から現在に至るまで、少ない時で定数四と同じ人数、多い時には七人の保守系候補が立候補している。それ故、革新系候補が一人でも当選すれば、保守系候補のうち一人は落選する羽目に陥る。自民党結党以前も、結党以降も自民党候補者にとって激戦であることには変わりない。戦後何人もの代議士たちが数回当選しては、消えていった。外務次官をつとめ、日ソ国交回復に尽くした松本俊一は三回当選したが、二回連続して落選して退いた。防衛事務次官であった加藤陽三は二回当選したが、二回落選して、政界から引退した。泡沫ではない代議士にとっても、議席を維持するのは困難である。この傾向に一層拍車をかけたのが、池田勇人の跡を増岡博之が一度は継いだのに、一二年して、勇人の娘婿が立候補した。増岡と池田は同じ派閥・宏池会に所属する。激戦の

理由はこれ以外にまだある。中川と谷川は同じ旧賀茂郡、しかも一つ隔てた町を出身地としているからである。

二区は激戦区にとどまらない。保守優位の選挙区でもある。第2―1表に示したように、二二回の選挙を除けば、定数四議席のうち、自民党三議席、社会党一議席というのが典型的パターンであり、自民党が議席を独占した選挙は過去三回もある。

党派別得票率の中にも、保守優位という特徴をはっきりと読み取ることができる。

以上のような保守的な政治風土のなかにいるのが、これから取り上げる三人の「世襲」代議士——谷川和穂、池田行彦、中川秀直である。三人はいずれも自民党の代議士である。

順を追って、三人の経歴を父、義父も含めて、紹介してみよう。

谷川和穂の父、昇は三人の中では最も早く一八九六年に賀茂郡西志和村、現在の東広島市に生まれた。父にしたがってアメリカにわたり、イリノイ大学、ハーバード大学大学院を終えた。帰国後は、東京市役所に入り、東京都防衛局長、そして山梨県知事、内務省警保局長をつとめた。自由党政調会副会長が政治家としての経歴である。一九五五年第二七回総選挙において当選するが、その翌日五八歳で急逝した。

和穂は一九三〇年生まれである。慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程を「Today's Problems in American Metropolitan Government」という論文を提出して終え、ハーバード大学大学院に留学中に父を亡くする。父が亡くなった次の二八回総選挙には、全国最年少二七歳の若さで当選した。文教族の一員に数えられ、衆議院法務委員長、文教委員長、防衛庁長官であった。

広島県が生んだ二人の総理大臣のうち一人、池田勇人は父が戸長であった。したがって、三家族のうちでは唯一、三代にわたって政治に携わっていることになる。一八九九年、豊田郡吉名村、現在の竹原市に生まれた。京都大学を

第2—2表 当選・落選・得票

第1世代	谷川 昇	池田勇人	中川俊忠
生年	1896—1955	1899—1965	1903—1973
第2世代	谷川和穂	池田行彦	中川秀直
生年	1930—	1937—	1944—
第22回総選挙			33185*
23	56477		25617*
24		61072	45523
25	32457	90091	27499*
26	36020*	68387	55667
27	<42730>	62191	52213
28	44635	83913	43869
29	41226*	83817	54565
30	69912	74507	50602
31	51901		50995
32	64518		57145
33	50389		46063*
34	48140*	63873	68212
35	69068	57906	53489*
36	72302	79417	81253
37	62124*	70839	63847
38	93578	71130	72114

- 1) 総選挙の右の欄の数字は獲得した得票数である。
- 2) \*は落選の印である。
- 3) アンダーラインは世代の交代を表す。
- 4) 第27回の谷川昇の<>は当選後の死亡を表す。

三家族を二世代にわたってみると、二家族は同一議業から後継者を補充し、三家族とも若くして議員職を継いだという共通点を見いだすことができる。

秀直も義父のように、日本経済新聞の記者から代議士への道歩んだ。一九四四年東京に生まれ、旧姓は佐藤。彼もまた養子である。慶應大学を卒業し、俊思の落選した次の選挙から新自由クラブの爆発的ブームを背景にして当選。三二歳であった。

最後の中川俊思—秀直には官僚の経歴はない。俊思は竹原市新庄町の堀川家に一九〇三年に生まれ、賀茂郡豊栄町中川家の養子になった。中央大学を中退し、日本経済新聞などの新聞記者であった。戦後第一回目の二二回、つづく二二三回総選挙につづけて落選し、二四回によりやく当選した。八回当選したが、政務次官の経歴しかない。

行彦は勇人と同じ大蔵省の出身である。一九三七年神戸に生まれた。旧姓は栗根。東京大学法学部を卒業し、広島国税局間税部長、大平大蔵大臣秘書官を経て、三九歳で代議士に当選した。池田勇人が亡くなって、二二年後のことである。地盤は増岡博之がすでに継承していた。

卒業し大蔵省に入り、長い闘病生活を間にはさみ、大蔵事務次官から、代議士になった。通商産業、大蔵、国務大臣、経済審議庁長官などを歴任した。



第2-3表 2区の有権者数・比率の変化

総選挙回	有権者数		有権者の比率	
	30回	38回	30回	38回
広島市安芸区		46633 <sup>人</sup>		9.2%
呉市	148891 <sup>人</sup>	166878	37.7%	32.8
竹原市	23045	26610	5.8	5.2
東広島市		58323		11.5
安芸郡	106935	120023	27.1	23.6
賀茂郡	57456	30434	14.6	6.0
豊田郡	58165	60457	14.7	11.9
市部計	171936	298444	43.6	58.6
郡部計	222556	210914	56.4	41.4
総計	394492	509358	100.0	100.0
豊浜町	3987	2716	1.0	0.5
豊栄町	4910	4112	1.2	0.8
福富町	2697	2430	0.7	0.5

1) 広島市安芸区及び東広島市は第30回総選挙当時、まだ成立していなかった。

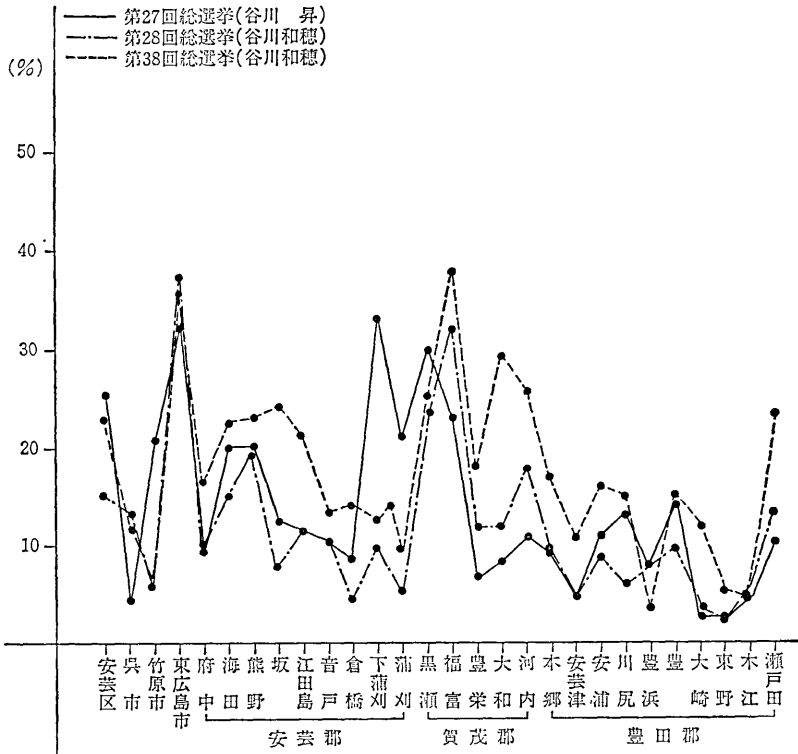
した最後の選挙、第二世代が受け継いだ最初の選挙、そしてその後の変化をみるために最近、行なわれた第三八回総選挙、計三回の絶対得票率を比較してみよう。

個々の得票率をみる前に、二区全体の有権者数の推移を検討しておこう。第2-3表のように、有権者は三〇回から三八回までの間に約一萬四千人増えている。町村の広島市への編入、東広島市の誕生（一九七四年）などによって正確な比較はむづかしいが、市部での有権者は増加し、二区全体の六割弱を占めるまでになっている。安芸郡のなかには広島市のベッドタウン化した町がいくつも含まれているので、都市化した町の比重はなおさら増している。反対に、こういう町を含まない賀茂郡は半分近くまで有権者が減り、豊田郡の有権者増加率もわずかにすぎない。二区に占める郡部のウェイトは軽くなってしまった。

二区が激戦区であることはすでに述べた。三家族にとても例外ではない。第2-2表に一目瞭然のように、池田勇人一行彦以外は谷川昇は一回、和穂は三回、中川俊思は四回、秀直は一回の落選の経験がある。世襲議員は悠々と当選するというイメージがあり、新人当選率は一般的に高い。例えば第三三回総選挙においては、新人候補の平均当選率は二四・五%であったのに対して、「世襲」候補のそれは六四%であった。だが、二区の場合、選挙は楽ではない。この点を検証するには、第一世代の票を第二世代がそのまま継承しているのか、それとも変化しているのかをみてみればよい。第一世代が当選



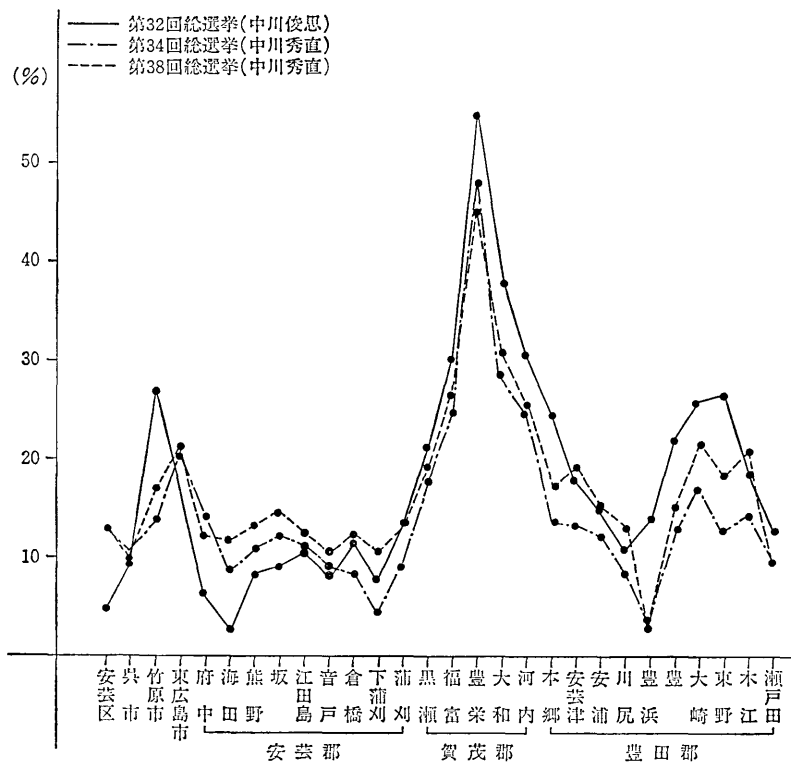
第2-3図 谷川昇・和穂の絶対得票率の推移



ているということである。もう一つは高得票率をあげた町の数である。勇人は豊浜町では八一・三%もの驚異的な得票を得ている。五〇%以上の高得票率の町・市が勇人には全部で五つあるのに対して、行彦には豊浜町の五〇・八%が一つあるにすぎない。勇人が総理大臣であったからこのような得票構造になっているのかもしれないが、行彦の得票率は全般に低くなっている。行彦も三〇回から四分の一世紀経ち、五回選挙をしてみると、全体の形状は残しながらも、広島市周辺の町で得票を伸ばしていることが、図から読み取れる。

谷川昇の最後の選挙から和穂の最初の選挙まで、約三年経っている。第2-3図が示しているように、両者は出身地の東広島での得票が高いというの

第2-4図 中川俊思・秀直の絶対得票率の推移



は同じであり、賀茂郡と豊田郡の島嶼部は比較的似た曲線を示している。但し、得票率を比べてみると、昇は和穂よりも安芸郡の倉橋、下蒲刈、浦刈において、反対に和穂は呉市、東広島市、賀茂郡の四町において、父以上の得票をあげた。二世代の地盤とする地域を除くと、和穂の二八回と三八回の総選挙のグラフのカーブが、二つの選挙の間に、約三〇年の期間があるにもかかわらず、酷似している。

第2-4図は中川俊思—秀直の絶対得票率を示している。俊思は第三三回総選挙に落選しているので、三二回を比較の軸として選んだ。二人の間には切れ目がない。この図は議席の継承の実態を如実に表している。つまり二人の曲線の間には、類似性がある。とくに、出身地の豊栄町を中心にした賀茂

第2-4表 市町別平均得票率 (第34-38回総選挙)

平均得票率	池田行彦	谷川和穂	中川秀直
40-50%	豊浜町		豊栄町
30-39	竹原市	福富町	大和町
20-29	蒲刈町	東広島市	
	安芸津町	大和町	福富町
	豊町		河内町
	東野町		
	倉橋町		
	本郷町		

郡の得票が多い。

もう少し子細にみていくと、「世襲」とはいえ、中川秀直に限定されないが、候補者の個性がでてきているのがわかる。二人の曲線は類似しているけれども、秀直は安芸郡、呉市、東広島市などの都市部で得票を伸ばしているのが理解できるだろう。新しい票田の開発がなければ、秀直の当選はおぼつかなかったに違いない。

以上の各代議士の得票の図をみると、いくつかの町で高得票を獲得していることがわかる。五回の平均は、第2-4表が示しているように、池田行彦は七町一市、谷川和穂は一市二町、中川秀直は四町において二〇%以上の高得票率をあげている。このような高得票をあげることのできる理由が何かあるのだろうか。

議席の継承が票の継承—地盤にほかならないとすれば、特定の町での高得票の原因を追究していけば、「世襲」の実像に一步でも近づくことができるのではないか。現職の三代議士が三四回から三八回の間にもっとも高い平均得票率を得た町・市との関係に限定して、高得票の原因を探ってみよう。

池田の得票率が高い豊浜町は平均得票率は四七・九%である。勇人、行彦の出身地でもない。それでももっとも高い得票率をあげている。池田が亡き後、増岡博之が地盤を継いだ。娘婿行彦が出た一九七六年の総選挙は、当時の岡本町長が増岡支持から池田支持に戻らなかったために、町は池田派石井周助役(当時)と増岡派岡本町長の二つにわかれて、たたかわれた。一二七九対九〇〇票で池田派が勝利をおさめた。翌年の町長選には石井助役が現職を破り、町長に当選した。

豊浜町長の部屋には池田勇人の大きな写真が飾られ、近くの島を見おろす神社には「日清・日露並支那事変及大東

第2-5表 衆議院議員と町議会議員の支持関係

代議士名	豊浜町		福富町		豊栄町	
	人	%	人	%	人	%
池田行彦	7	58.3 <sup>9</sup>	2	16.7 <sup>9</sup>	2	14.3 <sup>9</sup>
谷川和穂			5	41.7	3	21.4
中川秀直			3	25.0	2	14.3
増岡博之	2	16.7				
回答なし	3	25.0	2	16.7	7	50.0
総計	12	100.0	12	100.0	14	100.0 <sup>9</sup>

「匪戦争」で亡くなった人たちのために「忠魂碑」という池田の筆になる石碑がある。そもそも豊浜町の人々が池田勇人を応援するようになったのは、元内務大臣望月圭介以来、豊田郡出身の代議士がいなかったからである。それ以上に、当時の村議会議長、町長が池田と同じ旧制忠海中学の出身だったからである。<sup>9</sup>代議士になって以降、池田が町のために尽くしてくれたのは離島振興法の成立をはじめ、数限りない。町の人も「池田さんが道路を作ってくれた」と信じている。票を多く出したことが勇人がよくしてくれた理由かもしれない。勇人から行彦へのバトンタッチまで一年間の空白があるにもかかわらず、勇人への恩義の意識は、娘婿行彦にも生きている。

町議会議員は第2-5表のように、池田行彦支持七、増岡支持二名に分かれている。補足的に行なったアンケートによれば、池田勇人、行彦を二代にわたって支持している町議会議員は六名いる。世襲代議士は、豊浜町では町議会議員も受け継いでいることになる。

福富町は谷川のもっとも得票率の高い町である。第一世代昇の生まれた町の隣町である。三四・八%。他の二人に比べると、最高得票率は低い。池田と同じように、出身地ではない。東広島市に合併する以前であれば、二八回と少し古くなるが、志和町で六八・八%の得票率をあげていた。同時に中川の出身地豊栄町に隣接しているこの町は、中川の得票率も町別では五番以内に入っている。町議会議員は衆議院議員との関係で、谷川五、中川三、池田二、不明二名程度の色分けはされているが、町議会を二分して、衆議院選挙を行なうということはない。谷川の出身地東広島市志和町に近い竹仁地区と中川の出身地に近い久芳地区に、それぞれの陣営の親類縁者が入り、票を求めて運動を展開する。一度できた町民と衆議院議員の支持関係は強固であり、その時その時の勢いが票差の大小になって表れる。<sup>10</sup>

第2-6表 衆議院議員と町議会議員の支持内容

	豊浜町	福富町	豊栄町
後援会への入会	77.8	90.0	62.5
事務所での手伝い		20.0	12.5
投票の依頼	77.8	60.0	62.5
その他		10.0	

- 1) 表の数字は回答者のうちの比率(%)を表す。
- 2) 回答は複数回答である。

中川俊思―秀直がもっとも得票率の高い豊栄町では四八・三%をあげているが、この町は二人にとっては本当の出生地ではない。養子先の町である。にもかかわらず、彼らは二代にわたって高得票率をあげている。妻の出身地であってもそれほど大きな意味をもつものだろうか。

町議会議員は、共産党議員を除く保守系無所属議員は一三名である。国会議員との支持関係は第2―5表の通りであるが、アンケート回収率は悪く、しかもインタビュー結果とも違いすぎ、表は実態を表しているとは言いがたい。この町でも福富町と同じように、町を二分してまで選挙を繰り広げるといふわけではない。町のある人は中川が票の多い理由として、同じ地域ということをあげた。「政治の話にかぎらず、何か頼みにいくとしたら、同じ地域の出身の人がいれば、自然とその人の所に行くのではないだろうか。出身地が同じであれば、話の糸口もできる。話しやすい、親しみを感じる。要望も聞いてくれる。」<sup>(11)</sup>というわけである。この積み重ねが二代にわたって中川への親しみを増している。

町議会議員の国会議員への支持の度合をはかるのはむづかしいが、三町における支持関係は第2―6表の通りである。「後援会に入会している」が支持強度一とすれば、「自分の支持者にも投票の依頼をする」は強度二、「選挙の候補者の事務所に行って手伝う」は強度三ということになるだろうか。福富町の中川代議士支持議員二名がこの三つの項目にすべて○印をつけている。この二人を除けば、強度二の投票の依頼にとどまる。投票の依頼がもっとも多い豊浜町が、国会議員と町議会議員の支持関係がもっとも強いということになるのだろうか。

### 三 高得票の町と町議会議員

三代議員が高得票をあげつづけた三つの町——豊浜、豊栄、福富町<sup>(12)</sup>を分析するのが、この節の目的である。

#### (一) 豊浜町

〈概観〉

広島島の宇品港から愛媛県今治行き高速船に乗って豊浜町まで、一時間一七分。途中の呉までは工場が沿岸に点在している。町は瀬戸内海に浮かぶいくつかの小島からなっている。高度成長の始まる頃、島に着くには、船から伝馬船に乗り移らねばならなかった。<sup>(13)</sup>

人口は一九五〇年代をピークに減りつづけ、現在は約三五〇〇人。三〇年前に比べると二分の一になった過疎の町である。その勢いは一向に衰えそうにない。高齢者もすでに二割を超えている。

主要な産業は水産業。広島県内の町のなかでもっとも漁業従事者が多く、五トン以上の船を所有している人の数も多い。県内きつての漁業の町である。地元の漁場で漁をする人は少なく、大多数は長崎、鹿児島にまで出漁する。

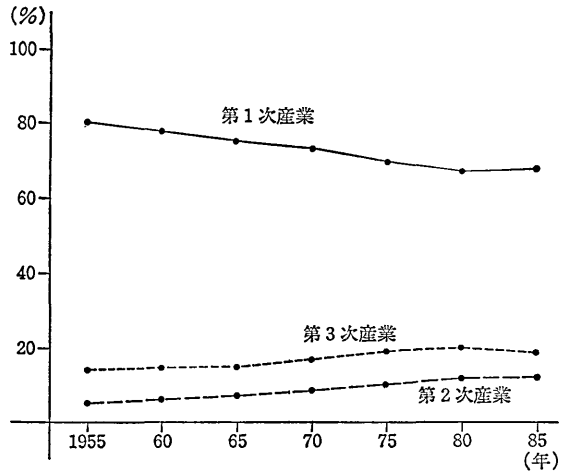
そのため、島には老人と子どもが残ることになる。子どもたちのためには学寮<sup>(14)</sup>がある。

齋島周辺では渡り鳥アビを使った漁をしているので有名である。アビが鯛やすすぎの好物イカナゴを食べるために、アビを目印に漁をする。

瀬戸内海の他の島と同じように、みかんの産地でもある。農産物の八割強をみかんが占める。農業ではオレンジ自由化に備え、みかんの高品質化、四季を通して果物の島となるように作目の多様化を、漁業では漁協の一本化、販売体制の確立、まだい、あこう、すすぎなどの高級魚の産地をめざしている。さらに高知と同じ気候をもつ齋島を海の



第3-1図 豊浜町の産業別就業者人口



第3-1表 豊浜町町議会議員

職業	1961年		1987年	
農業	11人	52.4%	4人	33.4%
漁業	2	9.5	1	8.3
自営業	7	33.3	6	50.0
会社員			1	8.3
団体役員	1	4.8		
議員数	21	100.0	12	100.0
議員年齢	47.1歳		51.5歳	
当選回数			4.3回	

1) 議員年齢・当選回数はそれぞれ平均である。

軽井沢にしようとしている。「味と香りのある島」がキャッチフレーズである。

町は長期計画を策定中であり、ハーバーパークを県と作る予定である。<sup>(15)</sup>一九八八年大崎下島と豊島を結ぶ橋の建設にとりかかる。

産業別就業者人口は第3-1図のように、第一次産業人口が減り、第二次、第三次人口が増加している。とくに、第二次産業の人口が倍になっているとはいうものの、他の町に比較すると、第一次産業への依存度は依然としてはるかに高い。

保守度をみるのに重要な持家率は、六〇、七〇年代と少しずつ上昇し、八五年現在九二・九%が自分の家を持っている。

第3-2表 政治家との姻戚関係

		豊浜町		福富町		豊栄町	
町議会議員定数		12 <sup>人</sup>	100.0%	12 <sup>人</sup>	100.0%	14 <sup>人</sup>	100.0%
親戚に政治家がいる		8(6)	66.7	4(2)	33.3	4(2)	28.6
内訳	町議会・村議会議員	8	66.7	2	16.7	3	21.4
	町長					1	7.1
	国会議員			1	8.3		
	記入なし			1	8.3		
	戦後政治家であった者	8	66.7	2	16.7	3	21.4

- 1) 表の数字はインタビューとアンケート結果をあわせたものである。  
 2) ( )の数字は父、または義父が議員であった人数を示す。

〈豊浜町議会〉

議会の特徴を明らかにするために、一九六一年と一九八六、八七年の議会とを比較してみよう。<sup>(16)</sup>

議員の法定定数は一六であるが、現在、減員をして一二人になっている。この間、議員数は半数近くに減っていることになる。

議員の平均年齢は約五歳上昇している。これは町民全体の年齢の高齢化を反映しているからであるが、議員定数が減って、若い議員が出にくくなったことにも原因がある。<sup>(17)</sup>

議員の職業構成は第3-1表の通りである。第一次産業従事者の減少以上に、農業を職業とする議員の後退が顕著である。代わって、自営業が議員の半数を占めている。漁業が豊浜町の代表的な産業であるにもかかわらず、漁業を職業とするものはわずか一人しかない。

興味深いのは、姻戚に政治家をもつ議員の比率である(第3-2表参照)。一九八七年現在、一二名中六名が父、一名が兄、一名が義兄が町議会または村議會議員であった。六六・七%が政治家族ということになる。この傾向は、次回の選挙でもさらに強まりそうである。八人の親戚ともすべて戦後議員であった。政治家族は国会議員だけではなく、この豊浜町議會議員のレベルにもみられる。議員の職業的背景は変化しているにもかかわらず、同一家族が議員を補充する源となりつづけている。

議会の静態性を象徴する指標は、他にもある。無投票である。一九八七年四月の町議會議員選挙は無投票であったし、町長選は、一九六九年の町制施行以来五回のうち四回まで無投票であった。さらに、豊浜町議会は保守系無所属の議員からだけで構成されている。

## (二) 福富町

〈概観〉

福富町は特別天然記念物オオサンショウの生息地として知られ、八〇・七%の面積が林野である。冬には三〇センチ程度の雪が数度降る。

広島市内からはJRで西条まで三二分、そこから福富町へはバスで三五分かかる。バスの本数は一時間に一―二本である。山陽自動車道が開通すれば、車での所要時間はずっと短縮されるだろう。

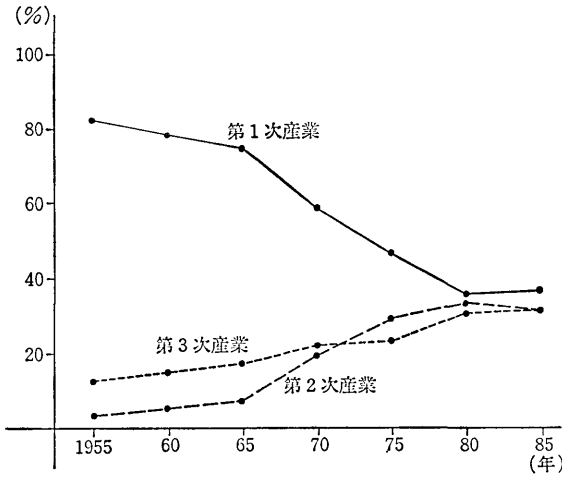
人口は約三一〇〇人。一九六〇年代と比べると、人口は三三%減少した。高齢者の割合は二三・三%である。

産業は生産額でみると、工業がトップである。コンクリートの工場や縫製工場などが主で、目だった産業といえるものはない。農業生産額では、半分が米であり、これに一〇数戸の酪農家が生産している生乳と肉用牛を加えると七割をこえる。

町の実状を知る上では、一九八七年三月に行なわれたアンケート調査が参考になる。<sup>18)</sup> 町民の多数は福富町に長年住んで愛着を感じ、自然環境を愛し、これからもひきつづき住みたいと考えている。

一九七八年に町は長期総合計画を策定し、「緑あふれる町づくり」を進めている。しかし、発展計画を押し進める上で障害になっているのが、町の中心部に作られるダムである。広島県は一九七四年にこの計画を発表したが、未だ着工されず、二一世紀近くにならなければ完成しない。町はこれに合わせて、様々な計画をたてている。そして福富

第3-2図 福富町の産業別就業者人口



第3-3表 福富町町議会議員

職業	1961年		1987年	
	人数	比率 (%)	人数	比率 (%)
農業	11人	78.6%	11人	91.7%
自営業	3	21.4	1	8.3
議員数	14	100.0	12	100.0
議員年齢	50.1歳		57.6歳	
当選回数	2.0回			

1) 議員年齢・当選回数はそれぞれ平均である。

三三・三%。

の従事者は第3-2図のように半分以上に半以下になっているのに、逆に農業を職業とする議員は一二名中一二名まで占めるまでになっている。父親が議員であった者は二名、その他の親戚二名である。比率は

議員数は一二名。本来の議員定数は一六名である。したがって、定数が四名削減されていることになる。一九六一年と比較すると(第3-3表参照)、議員の平均年齢は約七歳上昇している。福富町議会議員の代表的な職業は第3-3表のように、農業と自営業である。六一年と八七年の間に、第一次産業は、広島中央テクノポリスの協同圏域のなかにあるという地理的位置から、広島新空港、山陽自動車道へのアクセス道路の整備をするとともに、将来は東広島市のベッドタウンとなる方向を模索している。〈福富町議会〉

この町ではむしろ、町長選が一九七六年以来過去四回つづけて無投票であったことの方が注目し値する。現佐々木文夫町長は二回無投票で当選した。一回目は選挙の告示二日前に、前町長が広島県議会賀茂郡区補欠選挙において票のとりまとめなどのために、現金六〇万円受け取った疑いによって逮捕されたために急遽立候補することになり、他に対立候補がいなかった。<sup>(19)</sup>無投票の原因を「誰がやっても変わりばえがしない」とみているのは町の職員、収入役、助役を経験した町長である。

### （三） 豊栄町

#### 〈概観〉

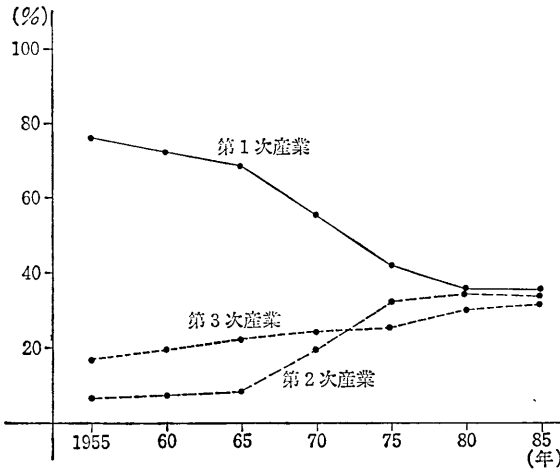
豊栄町は地図でみると広島県のほぼ中央部に位置し、広島、島根の主要な河川——太田川、江の川、沼田川の水源地でもある。西条町から行くと、福富町の一〇分程度奥にある。りんごを作っている農家もある。

町役場は木造の平屋建てで、正面には「民主政治はきれいな選挙から」という大きな看板が立っている。過去四回の選挙においては、町議会議員選挙は定員の1・2から1・5倍の立候補があつて、激しい選挙が行なわれているせいでろうか。

人口は約五二〇〇人。他の二町よりは規模は大きいが、ここも過疎の町であり、高齢者の町でもある。「過疎といつても働く場所がないというのではなく、希望する職種がない、遊ぶ場所がないということではないか、その証拠にある工場では町の出身者は四〇%にすぎない」と町の企画課長は分析している。<sup>(20)</sup>

工業の年間出荷額は五一・五億円。そのなかの主なものは、高度経済成長の時代に進出してきたマツダの関連企業と農機具メーカー（佐竹製作所）である。産業別就業者人口では第3—3図のように、どの分野も似たりよつたりであるが、第一次産業従事者がわずかに多い。農業生産額のなかでは、米が七割弱を占める。

第3-3図 豊栄町の産業別就業者人口



第3-4表 豊栄町町議会議員

職業	1961年		1986年	
	人	%	人	%
農業	15	68.2%	7	50.0%
自営業	4	18.2	5	35.8
会社役員	2	9.1	1	7.1
会社員			1	7.1
団体役員	1	4.5		
議員数	22	100.0	14	100.0
議員年齢	50.1歳		57.2歳	
当選回数			3.2回	

1) 議員年齢・当選回数はそれぞれ平均である。

職業的背景は、第3—4表にあるように、一九六〇年当時と比較すると、七歳上昇している。平均年齢は五七・二歳。町民の高齢化と比例しているのだろうか、一九八六年の選挙から女性議員と共産党議員が誕生した。

かつて乃美中学校、森本女学校、芸陽バスの本社があり、町にも活気があったが、今はその面影もない。中央テクノポリス、新広島空港、山陽自動車道の波及効果を期待しているというものの、福富町以上に地理的に距離がある。今年度末までには長期計画が策定される。当面は庁舎の建て替え、総合文化センターの建設を含んだ町全体のゾーンづくりが課題となっている。

〈豊栄町議会〉

議員数は一四名、定数より、八名減員している。議員全員無所属ではあるが、一九八六年の選挙から女性議員と共産党議員が誕生した。

名、自営業が五名である。

父も議員であった者は二名。この中には元小学校校長の女性議員がいる。したがって、父、義父が議員であった者を含め、政治家を姻戚にもつ議員は二八・六％である。町議会議員から町長になった現職の吉川智男の父も、一九六二年から四年間町長をつとめていた。

町議会選挙は過去四回行なわれたのに対して、町長選挙は四回連続無投票であった。

#### 四 おわりに

なぜ政治家族が生まれ、維持されていくのだろうか。本稿との課題においては次のような意見がインタビューのなかにあった。例えば、呉において戦前政治家族の占める割合が高かったのは「海軍工廠があって、外部からの流入者が多かったために内部の結束が強まった」からであると述べたジャーナリストがいた。<sup>(21)</sup> 豊浜町においては池田勇人と町長が同窓であり、池田が豊田郡の出身であったというのが、高得票率の理由であった。本稿ではとくに取りあげなかったが、二区の瀬戸田町では、前町長が内務省の警保局長時代の谷川昇から恩義を受けたというのが、谷川和穂支持の理由であった。<sup>(22)</sup>

これらのなかで代議士を支持するきっかけになった理由を整理してみると、地盤が重要であることがわかる。<sup>(23)</sup> 一般に、地盤は「特定の政治家のために、選挙での集票を目的として一定地域において形成される、個人的な人間関係のつながりのネットワークである」<sup>(24)</sup>と定義されているけれども、地盤とは選挙区内の固定した得票を指す。この源泉となっているのが「同じ町の出身者を支持するのは自然ではないか」という素朴な意見である。有権者は代議士が、その父や義父が生まれた町であるから、彼らに一票を投じる。票を獲得する側では、出身町を拡げ、出身町に隣接した

町、さらには郡や市までも地元にしよ<sup>(25)</sup>とする。有権者も政治関係者もわが郡の出身者を国会議員に、ということになる。同窓生であるということも、議員を送り出す積極的な理由となる。集票のために作られたのではない人間関係も含め、一度できた支持関係は世代をこえて継承されていく。

二区においては中川俊忠と秀直の得票パターンは、地盤が継承されるということを実証している<sup>(26)</sup>。

但し、得票構造が二世代にわたって酷似していても、地盤をそっくりそのまま受け継ぐことができるわけではない。秀直は都市部において、和穂は一〇くらいの町市において第一世代よりも高い得票率をあげた。池田行彦は勇人が総理大臣であったせい<sup>(27)</sup>か、「縮小再生産」という曲線になっていた。

また、世代間よりも、自分が初めて出た選挙と最近の選挙の得票パターンの方が、二世代においては似ていた。さらに、地元票が次第に弱くなっているということにも注目しておく必要があるだろう<sup>(27)</sup>。二世代は第一世代のように、一つの町や市において大量得票することはない。池田勇人は豊浜町で、八一・三%の得票率をはじめとして、竹原市、蒲刈、豊、木江町において五〇%を越す得票をあげた。中川俊忠は池田ほどではないにしても、出身地の豊栄町において、五五・二%を得ていた。ところが、二世代の谷川和穂が東広島市や福富町において父以上の、そして池田行彦が豊浜町において五〇・八%の得票率をあげてはいるが、それでも、全体的にみれば、二世代は第一世代よりも、一つの町においてあげた得票率の低下は否めない。地元意識が全体として希薄になりつつある証左である。

このようにみていくならば、国会議員、誰その息子ということ、有権者がすでに知っているという「知名度」の役割も見逃せない。

もう一つのテーマ、世襲代議士に高い得票を与えている町に共通する地域特性については、過疎と高齢者の比率が高いというのが第一の特徴であった。第一次産業人口の比率の高さも共通点であった。言うまでもなく、持ち家率も



高かった。しかしながら、町は貧しく代議士に期待をかけなければならぬというわけではなかった。地域特性からみると、農村から都市へ若年層が流出し、農村には「古さがより沈澱してきている」<sup>(28)</sup>——これが世襲を残している一つの大きな要因に違いない。

町議会議員の世襲という面は、どうだろうか。豊浜町は六六・七%、豊栄町は二八・六%、福富町は三三・三%であった。ある調査によれば、近親者が戦前議員であった地方議員は二四%、戦後そうであった者は三四%<sup>(29)</sup>であった。近親者というのは父や義父より広い定義であるが、豊浜町以外では、とくに世襲議員が平均的の地方議会よりも高いとは言えない。したがって、世襲代議士に高得票を与えている町が、すべて町議会議員でも世襲度が高いというわけではなかった。むしろ、世襲度の高さは瀬戸内海の島の町議会議員の共通点かもしれない。調査をさらに進めていけば、島の町議会議員は世襲度が高いというのが、世襲選挙区二区の特徴となるかもしれない。<sup>(30)</sup>

世襲という現象が、ただ単に国会議員と町議会議員の両方のレベルに存在しているというだけではない。豊浜町議会の例にみられるように、町議会議員が二代にわたって同じ代議士一族を支持しつづけていたことも忘れてはならない。代議士の世襲を強化する重要な要因である。

政治との関連では、無投票も特徴の一つにあげられる。町長選が過去四回無投票であった町が二つ、残りの一町は過去五回のうち四回までが無投票であった。町長選の無投票が政治が静態的であることを示すかどうかかわからないが、ここにも問題が潜んでいるように思われる。町議会議員の大多数が農業、自営業従事者で占められ、所属政党も一人の革新系議員を除けば、残りは保守系無所属というのが世襲代議士に高得票を与えた町議会の現状である。

(1) 市川太一「広島県の政治的家族」、『修道法学』第七巻二号、一九八五年。

(2) 市川太一「日本の政治家族——その出身家庭と政治家への動機」(一)(二)(三)、『修道法学』第九巻二号、一九八七年、第十巻二号、第十一巻一号、一九八八年。

- (3) 選挙結果は次の資料——『第38回衆議院議員総選挙結果調・第14回参議院議員通常選挙結果調』広島県選挙管理委員会、一九八六年、及び『衆議院議員総選挙結果調』衆議院事務局編、第二七回、二八回、三〇回、三四回、三五回、三六回、三七回の各回を、市町村選挙については、広島県選挙管理委員会が所蔵する一九七三年から一九八七年までの該当する年度の『市町村選挙結果調』（広島県選挙管理委員会編）を参考にした。
- (4) アンケートは三八通郵送し、二六通の回答をえた。回収率は全体で六八・四%、町毎のそれは豊浜町七五%、福富町八三・三%、豊栄町五七・一%であった。
- (5) 前日本開発銀行広島支店企画調査課長は「瀬戸内海は常に時代の流れ、節目を反映している象徴的な地域と思われる」と述べている。「新時代・せとうち経済圏」(18)(42)(45)『日本経済新聞』一九八六年四月一六日、一月一一日、二月三日を参照。
- (6) 同右(14)(18)、一九八六年四月一六日、五月二一日を参照。
- (7) 青木康容「議会への道—新人議員と世襲議員」『国会議員の構成と変化』政治広報センター、一九八〇年、八四ページを参照。
- (8) 「二世議員の土壌」『朝日新聞』一九七九年一〇月一〇日、一四日を参照。
- (9) 町長インタビュー(一九八八年七月一三日)。
- (10) 町長インタビュー(一九八八年七月一五日)。
- (11) 町政関係者インタビュー(一九八八年七月一五日)。
- (12) 各町・市の現況を知るには『広島 21世紀わがまちづくり』広島県編、一九八七年が便利である。
- (13) 『瀬戸内海』(上巻)中国新聞社、一九五九年、三四ページ。
- (14) 『芸南地方 瀬戸の島』中国新聞社、一九七八年、二八ページ。
- (15) 『香りと輝きの町づくり』豊浜町、一九八八年。
- (16) 『広島県自治名鑑』広島県町村議会議長会発行(一九六一年)には議員の職業、略歴、住所が掲載されている。豊浜町については一九八七年四月二二日、福富町については一九八七年一月二五日、豊栄町については一九八六年一〇月六日の『中国新聞』に掲載された選挙結果を基にして作成した。
- (17) 町長インタビュー(一九八八年三月五日)。
- (18) 『広報 ふくとみ』福富町企画課、一九八七年六月一九日、及び『まちづくりに関する町民意識調査』福富町、一九八七

年を参照。福富町の四地区計九四六票配布され、回収率は八八・％であった。詳しい数字を紹介すると、福富町を「住みよい」と評価している住民は約七割いる。その理由としては「長年住みなれて愛着がある」（六二％）、「自然環境がよい」（四七・五％）があげられていて、住民の福富町に対する意識をうかがわせる。約八割の人が今後住みたいという定住意向をもっているのも、それを裏づけている。

(19) 『中国新聞』一九八二年四月一〇日、一二日、一三日、九月一日。広島地裁は福本前町長に対して懲役一年、執行猶予四年、追徴金六〇万円の有罪判決を下した。

(20) 一九八八年七月一八日インタビュ。

(21) 『戦後広島保守王国史』（溪水社、一九八三年）の著者、林立雄の説明。

(22) 町長インタビュ（一九八八年三月二日）。

(23) セイヤーは地盤を二つのタイプに分けている。一つは山型である。これは出生地や特定の地域から集中的に得票しようとする伝統的なやり方である。これに対して、水平型はまんべんなく集票する。石川は地元票を変わらぬ構造の代表として取りあげている。三木武夫の選挙区徳島では、「三〇年間、山型の模様はほとんど微動だにしない」。セイヤー『自民党』雪華社、一九六八年、八一―八五ページ及び、石川真澄『戦後政治構造史』日本評論社、一九七八年、一六一―一六五ページを参照。

(24) 若田恭二『現代日本の政治と風土』ミネルヴァ書房、一九八一年、二四ページ。

(25) 代議士秘書インタビュ（一九八八年七月二〇日）。富田信男は『議会政治への視座』（北樹出版、一九七八年、一一―一五ページ）のなかで、地元意識を次の三つに類型化している。(一)「地元利益を願って形成される意識」、(二)「ダイレクトに個人的な恩恵授受やパーソナルな付き合いを通じて形成される地元候補としての有権者側の意識」、(三)「身内意識」に由来する地元意識。富田が重視しているのは第三の意識である。

(26) 例えば石川真澄は「この（Ⅱ血縁による）相続は、父親の出身地を中心とする地域の得票率をそっくりそのまま、文字通り相続するのである」と述べている（『戦後政治構造史』一六七ページ）。

(27) 「地元意識」というものは都市部にいくにしたがってうすくなる」と述べているのは、セイヤーである（『自民党』八三―一〇〇ページ）。石川は地元票は大都市部になるとほとんど消えてしまおうと分析している。農村部ほどではないにしても、東京八区のように古くから発展した町には地元票は存在する。『戦後政治構造史』一六四―一六五ページを参照。

(28) 石田博英『私の政界昭和史』東洋経済新報社、一九八六年、二二七ページ。

(29) 黒田展之編『現代日本の地方政治家―地方議員の背景と行動―』法律文化社、一九八四年、一〇ページ。但し、この調査

は大都市中核、大都市近郊、地方中核、農業過疎の四地域に分類された二一市二区一町、九四〇人を対象にし、回収率は四七・四%であった。

(30) 例えば、二区にある瀬戸田町や倉橋町にも同じような傾向がみられる。

〔付記 本稿は一九八七年度広島修道大学総合研究所研究費による研究の一部である。〕